

〔特別寄稿〕

心理・福祉学科開設1年目と学生の皆様へのエール

秦 康宏

はじめに（本稿について）

2024年、大阪大谷大学に、生涯にわたって心身および社会的な健康で豊かな生活を「人と社会」「心理と福祉」の立場から探求することを目的として心理・福祉学科が新しく創設されました。2025年3月でちょうど1年を迎えるとしています。人間社会学会誌こみゅにかは、基本的には研究論文などを掲載する学会誌です。心理・福祉学科の1年という節目を迎えるにあたり、心理・福祉学科教員のそれぞれの思いや期待等を目に見える形に残しておこうということで、この特別寄稿が記されることになりました。心理学と社会福祉学のスペシャリストの先生方が集まっているこの心理・福祉学科の教員が、学科、心理、社会福祉これまでや未来をどのように描いているのか、学生さんに対する想い、伝えたいことなどの一環を感じ取っていただければと思います。

1. 学科の特色と立ち位置

2年生からは、公認心理師などが目指せる「心理コース」と社会福祉士などが目指せる「社会福祉コース」の2コースを選択できること、公認心理師と社会福祉士のダブル国家資格をめざせる点が、他大学の心理学科や社会福祉学科と決定的に異なる点です。私自身が調べた範囲でも、2024年現在、全国に7大学ほどしか確認できませんでした。私は、2022年度まで社会福祉士の国家試験委員をしていましたので、その関係で厚生労働省の専門官に心理と社会福祉のダブルライセンスが目指せる大学に移ることをお伝えしたところ、「そのような学科があるのですね。ぜひ、また教えてください。」ととても驚いておられたのを覚えています。社会福祉士が管轄となる方ですので、心理のことは詳しくなかったのかもしれません、それでも東京や関東でも珍しい学科であることは間違いありません。社会福祉の学科では、社会福祉士と精神保健福祉士のダブルライセンスが取得できる学科は珍しくありません。しかし、社会福祉士と公認心理師は、近いようでカリキュラム的には距離のある資格なのです。

本心理・福祉学科には、50名の定員に対して11人の専任教員がいます。学生さんと教員の距離が近く、授業、実習、ゼミ、キャリア等においてきめ細やかな関わりができることが特徴です。一方で、これらの強みは、同時に弱点にもなり得ます。たとえば、社会福祉コースの専任教員は4人となります。非常に勤勉に素晴らしい先生方が揃っておられるとはいえ、多い人数ではないかもしれません。だからこそ、それは、心理と社会福祉に分けて考えない立ち位置にいる必要があることを意味しています。心理だけでなく、社会福祉だけでもないというこの学科

の特色をもっと鮮明に、もっと伝わりやすく、形作っていきたいと思っています。広報活動の一環として、学生さんに心理・福祉学科インスタグラムの写真を提供してもらえばと思っています。

2. 心理・社会福祉、専門職、非専門職とアイデンティティの行方

少し硬い表現になって恐縮ですが、縦線を引いていただき、その上と下に心理と社会福祉という言葉を入れてみてください。続いて、クロスするように横線を引いていただきその両端に専門職、非専門職という言葉を入れてみてください。4象限マトリクスが現れたと思います。私自身は、大阪府枚方市にある社会福祉法人聖徳園で、在宅高齢者福祉に22年間携わってきました。その間、介護福祉士や社会福祉士という国家資格を取り、最終的には大学院社会学研究科社会福祉学専攻博士課程（後期課程）というところで、社会福祉の勉強をしました。大学の教員になってから18年になりますが、同じく、社会福祉の専門職養成に携わってきました。何が言いたいかというと私自身のアイデンティティは、社会福祉の専門職のところにプロットされます。そして、そのことは私が心理・福祉学科の教員になり切れていないジレンマを想起させることもあります。学生さんが、心理・福祉学科に所属されている以上、私たち教員のアイデンティティは、心理・福祉学科でなければならぬと思います。教員自身が、心理と福祉の重なり、専門職と非専門職の交差を大切に持ち続けようとする必要があると思っています。だから、4年間の中で、「コースやゼミの壁を越えた学科としての誰かをサポートする力（安田先生デザイン）」を涵養していただければと思います。そして、皆さんの将来は、対人支援の専門職、カウンセラー、ソーシャルワーカー、社会福祉施設の職員、民間企業社員、公務員等さまざまに、「小石のように」（中島みゆき：1979）開かれています。

3. 1年を振り返ってと学生の皆様へ

授業では、基礎ゼミIが特に印象に残っています。富田林市社会福祉協議会様への訪問や瀧谷不動尊、お昼休みの○シローなど楽しい思い出です。もっとフィールドワークを導入したいのですが、共通科目でもありますし、学習支援技術をしっかりとできなかつたという申し訳ない思いもあります。そして、なんといってもリーフレットの作成活動、中間発表会は本当に感動しました。

人間と社会Bでは、1限であるにもかかわらず学生の皆さんの素晴らしい受講態度に身が引き締まるような想いました。難い授業内容だと聞いてもらえないのではという想いから前半緩めの内容をしたこと、これでよかったのかと反省しています。普段からもっとコミュニケーションを図る機会があればと思います。オープンキャンパスなどに協力していただいた学生さんにも心より感謝を申し上げます。

大学全体のスケジュールとして入学の時はオリエンテーションや履修登録が集中的にありました。学生さん同士が交流できる機会、そして、それぞれが安心できる居場所づくりというも

のをさらに構築できればと思っています。

私自身の学生時代を振り返ると、大学というのは本当に不思議な場所だと思っています。大学は、物理的な意味では、場所、建物にすぎません。しかし、そこに友人がいて、先生がいて、色々な人がいて、その人たちとの出会いの中で自分の人生が方向づけられていく、すごい場所だなと思います。

私の恩師である西光義敵は、（1984）「暮らしの中のカウンセリング」有斐閣選書の中で次のように書いています。

－問題を解決し、悩みを解消することに役立つことこそ、カウンセリングの目的ではないかと人はよく言います。一応もっともですが、しかし、よく考えてみれば、人生は問題の連続であり、悩みは死ぬまで姿を変え、形を変え立ち現れます。ですから人間にとて本質的に重要なことは、人生に常に現れるどのような困難な問題にも自ら積極的に取り組み、これを処理していくだけの力を個人が発揮できるようになります。カウンセリングはまさにそのような人格的成长を主な目的とするものであって、表面的な個々の問題や特殊な悩みを対処療法的に解決することが目的ではありません。－この本の副タイトルは、「育ち合う人間関係」です。

また、私は不器用な人間で、できないことがとても多かったです。しかし、「どうせできないだろう」という思いが、「できた」に変わった瞬間、本気になって取り組めるものが見つかっていくものだと思います。

心理・福祉学科には本当に素晴らしい先生方がそろっています。どうか学生時代の貴重な時間を大切にしていただき、自分が成長できる存在であることを信じ、教員とのかかわりを大切にしながら、目標を持って資格取得、就職、実習、クラブ・サークル活動等に取り組んでいただけだと思います。

〔特別寄稿〕

心理・福祉学科設立に寄せて

田沢 晶子

人間社会学部、心理・福祉学科は、その前身となる人間社会学科、心理コースと社会福祉コースの特徴を全面に押し出し、さらには対人援助という専門性の融合を目指して、2024年4月に本学学長室、関係者のご協力を賜り設立されました。心理学、社会福祉学の学びを通して、人間の心、周囲との人間関係、生老病死といった生きるうえで必要不可欠な知識と技術を身に付けることが出来るのは言うまでもありません。さらに心理・福祉学科は、2つの対人援助領域を学んだ専門家を生み出すことになるでしょう。このような新学科に所属し、キャリア育成に関われることを大変嬉しく思います。

振り返ってみれば、心理・福祉学科の萌芽は、2005年度に遡ります。この年度に、コミュニケーション関係学科が改組され、新たに人間社会学部人間社会学科が設立されました。人間社会学科の4つのコースの1つとして「心理・カウンセリングコース」が産声を上げたのです。当初3人の教員がコースに配置され、筆者はこのメンバーの1人として着任しました。

本学において、初めて本格的に心理学、臨床心理学を学ぶことが出来るコースであり、心理専門家の育成をも目指したコースでした。当初、「本当に心理カウンセラーとなる人材を育成できるのか」といった心理・カウンセリングコースでの学びがいかに活かされるのかを疑問視する周囲からの声も聞かれたことを思い出します。ところが、人間社会学科、心理・カウンセリングコース設立から5年後には、臨床心理士指定大学院の合格者を輩出しました。コース名を「心理コース」と改めた後、19年間に渡り多くの優れた人材を育成してきました。現在、複数の卒業生が心理専門職の国家資格「公認心理師」を取得して、様々な現場で活躍しています。

ところで、人間社会学部は2012年度に一つの節目を迎えました。学科を構成する1コースあった健康スポーツコースのスポーツ健康学科としての独立を機に、新学科の一翼を担うこととなる「社会福祉コース」が人間社会学科内に設置されたのです。社会福祉学を専門とする3名の専任教員を迎え、より多様な学びを提供する新たな要素が加わりました。現在も、難闘である社会福祉士国家資格試験の合格率は、全国平均を上回っています。

このように、心理・福祉学科の土台となる実績が積み重ねられて行きました。特に2018年度には、公認心理師法による資格取得に必要な学部カリキュラムを整備し、社会福祉士と公認心理師という2つの国家資格を目指すことが可能になりました。実際、多くの講義、演習、そして現場実習を経て、このダブルライセンス取得者が2023年度に現れました。心理師受験資格を現場で働きながら目指す認定施設への就職者も2022年度に出ています。このような摇籃

期を経て、心理コースと社会福祉コースが、心理・福祉学科へと発展を遂げたのでしょう。本学科の教員としては、地域社会や所属する学生の皆さんとのニーズに応える姿勢を常に大切にして行きたいと考えています。そして引き続き、進学・就職を目指す学生の皆さんを全力でサポートして行きたいと思います。少し気の早い話ですが、心理・福祉学科の卒業生たちが本学に舞い戻り、先輩から後輩へ、実社会での経験や知識が引き継がれて行くような学科になることを願っています。

[特別寄稿]

学部学科再編と心理・福祉学科の展望

船本 淑恵

2007年4月に社会福祉士養成の担当教員として、大阪大谷大学教育福祉学部教育福祉学科に着任し、2024年度は同大学に勤務して17年になる。この間に2回の学部学科の再編が行われ、人間社会学部人間社会学科、そして、現在の心理・福祉学科へと所属が変更になった。所属学科が変わっても社会福祉士国家試験受験資格課程（以下、社会福祉士課程）は維持され、社会福祉士養成を継続して担当してきた。これまで実施された学部学科再編は、社会福祉士養成が主要な課題として取り組まれてきたものではないが、学部学科再編の際、新学科での社会福祉士養成をどのように位置づけるのかについて、その時々の社会福祉士課程の担当教員間で議論してきた。そこで、その際、議論された課題を取り組みについて整理し、心理・福祉学科における社会福祉士養成教育の期待を述べたい。

まず、本学において社会福祉士課程が設置された教育福祉学科は、幼小中高の教員免許、及び特別支援学校の教員免許、保育士資格に加え、社会福祉士国家試験受験資格と複数の免許、資格を取得できる学科であった。当学科において社会福祉士の資格取得を考えている学生は、保育士資格や幼稚園教諭免許、時には小学校教諭免許の取得もめざすことがあった。このように、資格等取得に意欲の高い学生が多い半面、関心が児童福祉の領域に偏っていたり、複数の資格等を取得するために社会福祉士国家試験の受験勉強に割く時間を確保できなかったりする状況も発生していた。また、就職先を選ぶ際も保育士資格を活かして保育所を希望する学生は散見できたが、それを除くと社会福祉現場を希望する学生は少なく、社会福祉士養成の担当教員間では、養成教育の課題ととらえていた。そのような中、人間社会学科内の健康スポーツコース健康コーススポーツを独立させ、新たにスポーツ健康学科を立ち上げ、人間社会学部を2学科体制にする再編の検討が始まった。同時に教育福祉学科も資格等の取得に際して、他の養成校と差別化を図るため、より専門的な付加価値を付随させた教育体制の検討が行われた。そのような中、社会福祉士養成の担当教員は、地域も含めた多様な社会福祉現場への関心を高め、国家試験合格率を向上させ、専門職として実践に携わる卒業生を送り出すには、教育福祉学科ではなく、人間社会学科に社会福祉士課程を配置した方が実現できると話し合った。様々な検討を経て、社会福祉士課程を人間社会学科に移行し、これまで3名体制であった担当教員に1名追加し、4名体制で養成教育の体制を強化することになった。

その後、2012年度に人間社会学部人間社会学科が、社会福祉、心理、現代社会、経営情報の4コース体制に再編されスタートした。社会福祉コースに設置した社会福祉士課程において、教育福祉学科では4回生配当のみであった国家試験受験対策の演習科目を3回生にも開設する

ことにした。加えて、他の養成校との差別化を図るために、3回生配当の指定科目の実習系科目以外に、2回生と4回生に社会福祉現場を体験できる実習系科目をおくことにした。また、社会福祉現場の仕事の幅広さや実践の意義を伝えるキャリア教育に関する授業内容を各科目の中で積極的に実施するようにした。その結果、多様な社会福祉現場への就職、国家試験合格率の向上を実現した。このように、人間社会学科における取り組みを充実させてきたが、社会福祉士資格取得希望者の減少を受け、さらなる強化策としてスクールソーシャルワーカーの資格を取得できるよう整備を図った。また、心理領域の国家資格として公認心理師が法定化され、心理コースにおいて公認心理師資格を取得できるよう指定科目の設置が行なわれた。そのため、社会福祉士資格取得をめざす学生の中でも二つの国家資格取得への関心が高まった。実際に社会福祉士国家試験受験資格を取得し、公認心理師資格取得のため、大学院に進学する学生も現れた。社会福祉現場で仕事をする場合、心理職と連携することも多く、利用者を支援する際に心理学の知識が役に立つという認識も広まった。しかし、高校生の受験動向を概観すると心理学への関心は高いものの、社会福祉を選択する受験生は減少傾向にある。近隣の競合大学も同様であり、そのため他の社会福祉士養成校との差別化を図る改革が行われていた。そこで、本学においても他大学との差別化を図り、特徴を打ち出すための検討を行なうことになった。

そして、2024年度に心理・福祉学科が開設された。もともと心理コースと社会福祉コースが同じ学科にあるため、新たに法定化された公認心理師と社会福祉士という二つの国家資格を取得できる基盤は整っていた。新学科の特徴は、心理学と社会福祉学の協働である。前述したとおり二つの国家資格取得をめざせるが、単純に各資格の科目を提供するだけではなく、心理コースと社会福祉コースの教員が協働して基盤的な科目を展開することにしている。その一つに、コミュニケーション力の向上を図る科目を充実させている。また、キャリア教育についても専門職はもちろんのこと、幅広い進路についても理解を深め、心理学や社会福祉学の学びを生かした選択を意識できるような講義が行なわれている。

このように、学部学科の再編に際して、その時々の課題に対応し、新学科での取り組みを進めてきた。心理・福祉学科の1期生を迎えたばかりであるが、様々な取り組みを学科教員が協力して実施している。学生たちが、多くの学びを得て、卒業していくことを期待している。

〔特別寄稿〕

心理と福祉の学びがつなぐ未来

安田 傑

2024年4月、大阪大谷大学に心理・福祉学科が開設されました。思い返せば2017年ごろ、心理学分野における初の国家資格「公認心理師」の法制度が整備されつつあった中で、本学で取得可能であった福祉領域の国家資格「社会福祉士」とあわせて取得できる「ダブルライセンス」のアイデアを思いつきました。このアイデアの実現に向け、心理コースと社会福祉コースの連携を強化してきた結果として学科として独立するまでに至ったことを思うと、創設者の人として感慨深いものがあります。この学科に寄せられる多くの期待に応えたいという思いを胸に、開設1年目は全力で活動し、気がつけば2年目を迎えることができました。これもひとえに関係者の皆様のご支援のおかげと、心より感謝申し上げます。

さて、心理・福祉学科の大きな特色は、「心理学」と「社会福祉学」の両方を同じ学科で学べることです。では、なぜこの2つの学問を組み合わせて学ぶ意義があるのでしょうか。それは、「どちらも自分や他者の不安を取り除き、幸福を生み出すことに直接的に結びつく学問だから」だと私は考えています。

例えば、「心理学」は心について専門的に扱う学問ですが、不安や幸福を感じるのは心の働きによるものです。そのため、自分や他者がネガティブな感情を抱えている時に、その気持ちを和らげ、前向きになれるよう働きかけるのが、心理学の得意とする領域です。一方、「社会福祉学」は、困難や不安を抱える人々の問題を解決に導くための制度や社会的支援の仕組みを専門的に学ぶ分野です。福祉分野で用いられている「（ふ）だんの（く）らしを（し）あわせに」という標語の通り、日常の中で誰もが抱える困りごとを解消し、幸せを生み出すことに貢献する学問です。

学問は人類の幸福に貢献するのですが、特に「心理学」と「社会福祉学」は、不安の軽減や幸福の創出を直接的に目指す側面が強く、だからこそ両分野を同時に学ぶ意義があると考えています。

このように2つの学問を専門的に扱う本学科には、「誰かの力になりたい」という想いを持つ教員や学生が、他の大学や学科よりも多く集まっているように感じます。教員が困っている学生を支援するのはもちろんですが、教員も専門領域以外の活動では支援を必要とすることがあります。その際、教員が学生に助けを求め、学生が教員を支える場面も、この1年間で何度も目にしてきました。このような教員と学生の自然な支え合いと、互いに感謝し合う関係が、

大学の建学の精神である「報恩感謝」の教えとも結びつき、心理・福祉学科の安心感や距離の近さを生み出しているのだと感じています。教員と学生に役割の違いはあっても、同じ立場でこの学科を作り上げていることは、本学科の大きな特徴の一つかもしれません。

私自身も教員の一人として、この学科で学ぶ学生の不安や困りごとを取り除き、それぞれの個性を尊重しながら、自分らしく生きることができるよう支援する役割を全うしたいと考えています。そして、この学科で学んだ学生たちが自らの心と生活の安定と共に、それぞれの大切な人を支え、幸福に貢献できる存在へと成長していく——そんな未来へつながる学科へと発展していくことを、心から願っています。

〔特別寄稿〕

心理・福祉学科の設立までとこれから

——その経緯を知る現場人として少しだけ記しておく

植木 是

「可能性の文学」を唱道した織田作之助（1913－47）は、無頼派、新戯作派の作家として知られるが、実は本学が位置する富田林市とも深い縁がある。彼は「人の一生は偶然の連続である。偶然を敏感に感受して必然に変えるのだ」と遺してくれている。

2017年度に筆者は本学人間社会学部人間社会学科に赴任してから、さまざまな変遷を経験した。当時の学部長である農野先生（現・大阪常磐会学園大学短期大学部学長）、理事長の左藤一義先生（現・学園長）、学長の尾山先生（2017年11月逝去）からは、社会福祉コースにおいて社会福祉士の養成に尽力するよう激励された。特に合格率を意識しつつも、実務に即した専門職の養成に力を注ぐよう求められたことが強く記憶に残っている。当時、本学には唯一の社会福祉士国家資格実践経験者として神部先生（現・花園大学教授）がいた。しかし、彼は「月1回程度の介護相談の非常勤職に就いているだけなので、実質的にはソーシャルワーカーの実践経験はない」と控えめに自認していた。そのため、筆者が唯一の社会福祉士国家資格実践経験者として存在を認められた。つまり、他の教員は現場経験はあるものの、社会福祉士国家資格を活かした現場実践の活動歴はないことを、後に繰り返し知ることになったのである。

このような状況下で、筆者を育ててくださった恩師の一人が神部先生である。彼との協働作業を通じて、筆者は社会福祉士の実践家を養成し、国家資格取得支援の方策を模索し始めた。当時の学部長であった農野先生とともに、「社会福祉演習Ⅰ」（国家資格受験対策科目）の指導にあたり、現場に即した問いかけて受験モチベーション、さらには就職への道程を経験させていただいた。現在、時折農野先生や神部先生と旧交を温める機会があり、同業者さながらであるが、このようなご縁とタイミングに日々感謝しながら過ごしている。

そのような中、2017年度末に農野先生と神部先生の主導により、社会福祉士国家資格課程にスクールソーシャルワーカー認定資格課程（正式名称「スクールソーシャルワーク教育課程認定事業」）を追加導入することが、当時の学科長である近藤先生のもと決定された。これは筆者が精神保健福祉士国家資格実践経験者であり、同資格課程に必須となる「精神保健の課題と支援」の科目担当および実務者指導が可能であったことが考えられる。そして何より実践現場での学校・教育相談活動（スクールソーシャルワーカー及びスクールカウンセラー派遣、療育等巡回相談支援、保育所等訪問相談支援、児童・家庭支援などの事業）に関わる実践経験があったためである。筆者がソーシャルワーク教育学校連盟（以下、ソ教連）に申請する代表教員

として、教員資格研修と申請方法、実践現場の開拓につき、近隣の大学および教育機関と連携をとることを強く推奨したことからも明らかであった。

2018年度、無事にスクールソーシャルワーカー認定資格課程がソ教連による審査に合格した。2019年度より、この上乗せ資格および公認心理師の学部指定科目履修を同時に受講できる「新・ソーシャルワーカー養成課程」（便宜上このように呼ぶ）第1期生が入学した。この第1期生は2023年度に卒業し、そのうち2名が社会福祉士国家試験に現役合格し、公認心理師の学部指定科目履修を修了した。いわゆる国家資格のダブルライセンス取得モデル学生の誕生である。その2名のうち1名は、社会福祉士国家資格、スクールソーシャルワーカー認定資格、教員免許状（「福祉」※新学科では廃止）、公認心理師養成大学院への進学の4つを現役合格・取得することに成功した。1年前よりダブル国家資格取得は可能であったが、挑戦者は途中で社会福祉士国家資格に専念し、その結果、大阪府公務員福祉専門職（社会福祉職）へ就職することになったため、結果的にスクールソーシャルワーク課程第1期生、つまり「新・ソーシャルワーカー養成課程」第1期生からその基礎が築かれたことになる。第1期生は、大阪府公務員福祉専門職合計4名（心理職1名、社会福祉職3名）に合格し、続く2024年度の第2期生も4名（社会福祉職4名）が合格、現在公募二次選考待ちが1名、その他に近畿圏内の地方公務員社会福祉専門職1名が合格、という成果を上げている。

2018年度末、農野先生が常磐会短期大学学長に就任されるため、定年より少し前に退職され、2019年度より代わりに谷先生が来られた。また、2022年度末には神部先生が花園大学に移籍され、2023年度より代わりに現・心理・福祉学科長の秦先生が来られた。2021年度には浅尾学長主導による新学科設立についての議論があり、心理学と社会福祉学を融合させて新たな創出ができるいかに焦点が当てられた。当時はコロナ禍であったが、年末年始など休暇期間中にZOOMを通じて方向性を確認することが繰り返された。2022年度には、新学科設立プロジェクトチームと学科再編ワーキンググループが立ち上がり、筆者もプロジェクトチームの代表教員2名のうちの1名となった（もう1名は心理・福祉学科初代学科長の小西先生。統括は岡島人間社会学科長、相談役は中道スポーツ健康学科長、学部責任者は児玉学部長）。

後からお越しになった谷先生と秦先生は筆者と同じく社会福祉士国家資格実践経験を有し、ソーシャルワーカー相談援助の実践経験もあるため、不思議な縁を感じると同時に、ともに力を発揮できる確信が高まった。設立前の準備段階である2021年度より本学に来ていただいた上西先生には、学務に加え、教職員組合活動を通じて学園本部や経営者側との交渉や意見交換会、学園中高の先生方との会談や協議などの機会に大変お世話になり、頼りにさせていただいている。そして2024年度より来ていただいた公認心理師国家資格実践経験を有し、豊富な心理臨床経験を有する浅野先生および河崎先生とは基礎コミュニケーション演習を共同担当することになり、たいへん心強い限りである。加えて浅野先生には各種委員会で本当にお世話になり、感謝の念に尽きない。

ここで新学科設立に寄せて、あらためて2024年度新設された現在の心理・福祉学科を取り

巻く大学環境体制を確認しておく。

- 大谷学園長: 左藤一義先生（2022 年度～、理事。前理事長）
- 大谷学園理事長: 左藤章先生（2022 年度～。前理事）
- 大阪大谷大学学長: 浅尾先生（2017 年度途中～、尾山先生ご逝去に伴い学長代行。
2018 年度～、学長、理事）
- 人間社会学部学部長・副学長: 中村雅司先生（2024 年度～、学部長。2020 年度～、副学長）
- 心理・福祉学科初代学科長: 小西先生（2024 年度 4 月～10 月）
- 心理・福祉学科第 2 代学科長: 秦先生（2024 年度 11 月～）
- 心理・福祉学科学科長補佐: 安田先生（2024 年度 11 月～）
- 人間社会学科学科長: 岡島先生（2020 年度～）
- スポーツ健康学科学科長: 中道先生（2022 年度～）

あわせて、『2024 年度 スクールソーシャルワーク実習報告集』（筆者編、2024 年 12 月発行）に寄せた拙稿「はじめに——SSW2 期生のみなさまへ——」の終わり部分から、以下を引用する。

[…]そつなくこなす、冷静淡々とした学年だったと思います。就職も決まり、あとはすいすいと進んでいく、個性的な学年でした。みなさまは、忘れもしない SSW 履修 2 期生です。先代に引き続き、3 期生への橋渡しとしてのお役目をしっかり果たしてくださいました。授業ゲストやハルカス交流会はもちろん、たまには羽根を休めに大学にもふらっとお寄りくださるとうれしいです。大学もみなさまを支えるために頑張り続けます。今年度もこのように言っておきます。みなさまのさらなるご活躍を、社会に出てからもお祈り申し上げます。そして、少し期待と心配もさせていただきながら、そっと社会福祉士の先輩として見守り続けたいと思います。今年度も。そしてずっと言い続けていけるように、よろしくお願ひします。／ ★SSW 履修修了（見込！）、卒業（見込！）、おめでとうございます！

このように、ご縁は続いていくのだな、と振り返りつつも、ほっと一息つく暇もない。ご逝去された尾山先生、ご退職された農野先生、神部先生らが見守ってくださっていると思いながら、2024 年度末を迎えることになる。

そして不思議なご縁で、筆者はスクールソーシャルワーク（社会福祉士・精神保健福祉士、公認心理師）とスクールカウンセリング（公認心理師、社会福祉士・精神保健福祉士）の臨床実践活動にも関与し、現在に至る。これは筆者の実践活動の原点であり、羅針盤でもあり続け

ている、立ち上げに関わった自閉症総合援助センターおよび発達障害総合支援拠点の現場での経験に基づいたテーマであり、実践を続けてきたものもある。専門領域や実践主体を横断しながら、乳幼児期から高齢期まで、出生前から親亡き後まで、幅広く親の会・家族会や当事者活動を草の根で協働支援するという実践的研究に繋がっている。筆者は当事者・家族たちとともにたいへん感謝している。同時に、日頃からお世話になっている当事者・家族たちのためにも、微力ながら、さらに尽力していこうと心新たにしている。

心理・福祉学科の設立に尽力した、まさにすべてのご縁に報恩感謝の毎日である。

〔特別寄稿〕

心理・福祉学科開設1年目とこれから

上西 裕之

心理・福祉学科が開設され、あと数ヶ月で1年が経とうとしている。毎日が100メートル走をしているように、過ぎ去っていく日々で、記憶も残像のように消えていくが、心理・福祉学科の1年目の記録として2つだけ記しておきたい。

まず、1つ目に挙げられることとして、基礎ゼミⅠで行ってきたリーフレット作成である。このプロジェクトでは、心理・福祉学科の一期生の学生たちが入学してから、大阪大谷大学で経験してきたこと、学んできたことを振り返り、学生自身が学内での取材や業者とのやり取りを行い、リーフレットを作成してきた。また、完成したリーフレットをこれまでお世話になった高校の先生や塾の先生、ご両親やご祖父母に持参し、感謝の念を伝えるというものである。背景には、本学の教育理念である「報恩感謝」を具現化するという考えがある。このプロジェクトは現在進行中であるが、印刷されたリーフレットが業者から届いたときの達成感はこの上ないものであった。学生たちは、工夫を凝らし、内容を精査し、マイキング動画や授業動画がリンクされたQRコードを埋め込むなど、さまざまな形で本学科のあり方を表現した。学生たちにとっても、自分たちが作った作品が実際の社会に出る喜びを感じる貴重な経験になったのではないかと思う。また、このような取り組みを学生たちがどのように感じているかについては、純粋に活動を楽しめた学生もいれば、「報恩感謝」を押し付けられることにうんざりした学生もいたかもしれない。この活動の教育的意義については、今後、教員が検証し、次年度にはその成果を示すことができると考えている。さらに、リーフレットを受け取られた方がどのように感じたかについても、教員がしっかりと追跡し、今後の教育に活かしていきたいと考えている。

2つ目の取り組みとして、オープンキャンパスの実施に関する改革が挙げられる。心理・福祉学科として1年目のオープンキャンパスでの大きな改革は、これまで教員のみで行っていた相談対応を多くの学生が参加し、高校生やご両親などへ学生が直接説明を担当したことである。具体的には、4月のオープンキャンパスから学生が参加するようになり、徐々にその人数が増え、夏休みには学生がナレーションを務める学科紹介動画が作成され、学生が司会を担当するまでに成長した。この1年間で、在学生がオープンキャンパスに積極的に関わることで、学生が持つ力を垣間見ることができたことは、教員として大きな喜びであり、大きな収穫でもあった。

さて、心理・福祉学科の今後として、まずは、学生への教育を充実させることが求められる。特に、心理学教育においては大学で学んだ心理学の内容を自分の経験に引きつけて考えること

ができ、さらに実生活の中で活かすことができる体験的・実践的な教育が必要である。また、自分の考えを整理して書くことや、論文を読み書きする力、すなわちアカデミックライティングの力を高めることも重要である。心理学・社会福祉学を実践・実感し、表現できるような学生の成長を期待したいと考えている。

[特別寄稿]

心理・福祉学科の強みと可能性

谷 俊英

心理・福祉学科、社会福祉コースに所属する谷と申します。私は 2020 年 4 月に、心理・福祉学科の前身である人間社会学科に着任しました。本学では主に、社会福祉士の養成に携わっています。着任前は、保育者（幼稚園教諭・保育所保育士・施設保育士）の養成に従事していました。そのさらに前には、児童養護施設で 14 年間、児童指導員および里親支援専門相談員（里親支援ソーシャルワーカー）として、こどもやその保護者の支援に取り組んでおりました。これらの経験を活かし、本学では実務家教員として学生たちの教育に力を注いでいます。また、本学に着任後は教務委員として、科目に関わる業務も担当しています。

心理・福祉学科の設立に向けた議論が始まったのは、2021 年度のことだったと記憶しています。私自身も、教育組織将来構想検討ワーキンググループ（以下、WG）のメンバーとして、大学組織の改革に携わりました。WG では、少子化の進行に対応するため、大学の教育組織をどのように改革すべきかが議論され、その中で「心理・福祉学科設立」という構想案が学長主導で提示されました。この発案を契機に、新学科設立に向けて本格的な取り組みが始まりました。私は教務委員として、心理・福祉学科のカリキュラム作成や社会福祉士の実習関係に携わりました。学科設立案の承認後、半年以内に文部科学省に提出する資料を作成する必要があり、多くの先生方や職員の方が一丸となって準備を進めました。その結果、2024 年 4 月に晴れて心理・福祉学科を設立することができました。

このような経緯で、心理・福祉学科はこの 4 月にスタートしました。本学科の最大の特徴であり強みは、心理の国家資格「公認心理師」と福祉の国家資格「社会福祉士」のダブルライセンスを目指せる点です。近隣の大学でも、一つの学科でこの 2 つの資格取得を目指せる体制は非常に珍しいと言えます。さらに本学科では、「スクールソーシャルワーカー認定資格」の取得も可能であり、トリプルライセンスを目指すことができる点が大きな魅力です。

こうした充実した体制を支えるのは、本学科に所属する対人援助のスペシャリストたちです。社会福祉分野においては、高齢者、障がい者、こども分野の実務経験を持つ実務家教員が揃っています。さらに、現役でスクールソーシャルワーカーや医療ソーシャルワーカーに携わる教員も在籍しており、幅広い分野での専門性を学生に提供しています。加えて、トリプルライセンス（社会福祉士・公認心理師・スクールソーシャルワーカー）を有する教員や、心理分野でスクールカウンセラーとして活躍した実務経験を持つ教員も在籍しています。このように、対人援助専門職を目指す学生にとって非常に手厚い教員体制が整っています。

また、専門職を目指さない学生に向けてもキャリア支援を重視しています。本学科には、キャリアコンサルタントの国家資格を有する教員も在籍しており、学生が企業など一般職を目指す際のサポートも充実しています。このように、本学科では多様な進路に対応できる体制を整えており、すべての学生がそれぞれの目標に向かって学びを深められる環境を提供しています。

そもそも、専門職であれ一般職であれ、人と関わるうえで心理学や社会福祉学は非常に役立つ学問です。心理学と社会福祉学は、人が生きていくうえで必要かつ実践的な知識を提供してくれます。私自身、学生に心理学や社会福祉学を説明する際には、「人のためになる知識を学ぶ以上に、自分自身の人生をより豊かで幸せにする知識を学ぶ学問である」と伝えるようにしています。

まだ学科がスタートして1年も経っていないが、本学科の学生たちを見ていると、「誰かのために何かをしたい」「人の役に立ちたい」という気持ちを持つ学生が多いと感じています。また、非常にアクティブな学生が多く、新たな取り組みとして行った学生主導のリーフレット作成では、学生同士が協力し、大成功を収めました。このリーフレット作成を通じて、学生たちは人と協働し、共通の目的を達成するやりがいや楽しさを実感したことでしょう。

この協働には、「誰かのために」「人の役に立ちたい」という気持ちがあると考えられますが、それだけでなく、「自身のため」にも多くの学びがあったのではないかと思います。本学科での学びを、「人のため」だけでなく、「自身のため」にも活かしてください。

本学科は、「二兎を追う者は一兎をも得ず」ではなく、「二兎を追う者は三兎も四兎も得る」ことができる学科であると考えています。学生たちには、このような気概を持って大学生活に取り組み、それぞれの夢を実現していただきたいと心から願っています。

[特別寄稿]

新参教員からみた心理・福祉学科の強み

河崎 俊博

本稿では、まず、筆者（河崎）の立ち位置について紹介し、次に、本学科の取組（強み）について論じる。

筆者は、2024年4月に着任したばかりの新参者であり、心理・福祉学科の立ち上げと同時の着任であったため、本学科のカリキュラム編成については関わっていない。したがって、本稿で取り上げる取組は、筆者が着任してから意義を感じたものである。

また、筆者は公認心理師、臨床心理士の資格を有しており、これまで医療領域（精神科単科病院）、教育領域（小中学校スクールカウンセラー）、産業領域（公立学校教職員向け相談員など）と、複数の領域で臨床現場に携わってきた。研究の専門分野は、人間性心理学であり、特に、心理学者 Carl Rogers が創始した Person-centered approach や、心理療法家であり哲学者でもある Eugen Gendlin が考案した Focusing を専門としている。人間性心理学は、“人間らしさ”や“自分らしさ”を研究する学問であり、自己実現や主体性などを中心テーマに据えている。学生たちは、「人間の成長や可能性を大切にする心理学」、「相談者の体験や気持ちを大切するアプローチ」と呼ばれることが多い。それゆえ、これから論じることについては、上記の経験や研究分野の影響を受けていることを予め示しておく。

さて、本学科の着目すべき取組は、3点挙げられる。第1に、心理学と社会福祉学の2つの学問領域が学修できる点であることは言うまでもない。心理学はこころに関する学問であり、本学科には、「人間性心理学」という他大学ではあまり見慣れない科目が用意されている。また、社会福祉学は、人が平等に幸福な生活を送るために、どのような支援や制度があればよいのかを研究する学問分野である。両者とも、ひとがひとらしく生きることを考える学問であり、公認心理師や社会福祉士といった資格取得を目指さなくとも、学生自身が生きる上で役立つ知識や技術をおおいに学ぶことは期待できるであろう。

第2に、心理学に関する授業に「精神分析」「認知行動療法」「人間性心理学」といった心理療法における3大潮流の科目がバランスよく用意されている点が挙げられる。授業では、各心理療法がどのようにして生み出されてきたのか、その背景や理論、技術を学び、どのようにして支援や実生活に活かすのか、体験的な学習も交えて学ぶことができる。特に、それぞれが持つ人間観の理解は、これまで考えることがなかった観点を学ぶことにつながるであろう。さらに、支援に活かすだけでなく、学生自身の自己理解にも役立つため、大学生活をはじめ、就職活動や社会人生活を送るうえでも、有意義なものとなるであろう。

第3に、「メンタルヘルスマネジメント演習」科目が用意されている点である。大学生時の

メンタルヘルス不調は、大学生活のみならず、卒業後の人生においても影響力が大きく、重要な健康課題である。人間関係をはじめ、種々の悩みや不調についてどのようにして対処してゆけばよいのか、本科目では、ストレス対処を指す「コーピング」、困難な状況からしなやかに乗り越えようとする力を意味する「レジリエンス」、ストレスフルな状況下でも心身の健康を維持できる「ハーディネス」、不調に対する対処法として近年注目されている「マインドフルネス」などをキーワードに授業が展開される。つまり、高校まででは学ぶことが少なかった、気持ちや不調との付き合い方について、体験的に学ぶことができるのである。

上記 3 点は、他大学でもあまり見られない取組や科目であり、本学科の強みと言えるであろう。

人生 100 年時代と呼ばれる現代において、今後ますます生き方も多様になっていくと指摘されている。本学科に所属する学生たちには、4 年間の大学生活を通して、“自分の生き方”や“自分らしさ”について、“自分なり”に模索しながら、人生 100 年時代に備えてほしいと願っている。